

W. Wordsworth と Rushbearing

—— 昭和63年度短期海外研修余滴 ——

斎 藤 和 夫

1. は じ め に

昭和63年8月、本学の研究助成による短期海外出張で、イギリス及びアメリカの文学史と関連が深い土地を歴訪する機会を得た。とくにイギリスに於ては、昭和61年8月の英国文学旅行に引き続いてその時に見残した土地を訪れるべく、England 北部と Scotland (と言っても Edinburgh のみとなったが) の旅を計画し実行したが、その途次、英文学を学ぶ者にとって“a promised land”と言い得る Lake District を訪れて、William Wordsworth を中心とする Lake Poets (湖畔派詩人群) の拠点となった Grasmere と彼の晩年の寓居 Rydal Mount を眼のあたりにすることができた。滞在したホテルのある Bowness の船着場で遊覧船に乗り、Windermere 湖の北端 Waterhead で下船、そこから北に Ambleside-Rydal Mount-Dove Cottage-Grasmere の町に至る約5マイルを徒歩旅行しながら、往時 Wordsworth 夫妻や妹の Dorothy, S. T. Coleridge, Robert Southey, Thomas de Quincy などの湖畔派の文人達や、Wordsworth と親交があって屢々訪れた Thomas Arnold (Matthew の父で Rugby 校の校長だった) などが歩いた足跡を辿った約3時間は、すれ違う若い hiker 達の‘Hallo!’というさわやかな声に力づけられて、まことに至福のひとつきであった。そしてやがて辿り着いたのは、この小旅行の終末点にふさわしく、Wordsworth とその縁者達が永遠の眠りにについている Grasmere の教区教会すなわち St. Oswald Church であった。古い教会なので村人の墓が肩をくっつけ合うように並んでいるなかで、ごく普通の墓石でなにひとつ特別な標示があるわけではなく、ひっそりと Wordsworth の墓があった。この墓のすぐ近くに、S. T. Coleridge の長男でこれも詩人であった Hartley Coleridge の墓があったのは、新らしい発見のひとつであった。1810年 Wordsworth と父 Coleridge との間に不幸な断絶があった時 Hartley は14才、父とともに暮したのではなくこの地に留まったのだろうか、いささか興味が湧いたが、後で記すように、この人の幼時のすがたが、Wordsworth の Immortality Ode のなかで触れられているところを見ると、父 Coleridge よりも Wordsworth にもっと愛されていたのかも知れない。Hartley にとっては父は自分の生母 Sara Fricker を疎外し別居して、Wordsworth の義妹 Sara Hutchinson を愛した人であった⁽¹⁾。

さて、この教会内で販売されていた資料やパンフレットのなかから、この村独得の教会行事である Rushbearing に関する最近刊行の(内容からみて1984年以降であることは間違いなし)解説パンフレットを入手した。写真10ページを含む僅か24ページの小冊子であるが、そのなかに4箇所亘って詩人とこの祭りとの関連が言及されていて、詩人のこの祭りに対する思い入れが可成りのものであったのを知って、Wordsworth の詩想の源に遡る糸口になるかも知れないと感じ、あらためて彼の作品を読み直しながらこの小論を試みた。なお、このパンフレットの書名は、*Rushbearing in Grasmere* で著者名も発行年度も表示されていない。以後本パンフレットを RB. と略称することにしたい。

2. Rushbearing の概略

RB. は所謂宣伝パンフレットではなく、その歴史の変遷を出来得る限り考証し、多くの人の証言をもとにした解説用のものである。

これによると、この祭りの時期と形式、内容は時代とともに可成り移り変わりがあるが、現在行われている内容はつぎのようなものである。

祭りの時期は、この教会の記念日 St. Oswald's Day (5th August) にもっとも近い土曜日、日曜日、月曜日にわたって行なわれる。(St. Oswald は Northumbria の王であったが、この地のローマ・ブリトン系のキリスト教が異教に支配されるや Scotland に亡命し Iona の宣教団を伴って アイルランド系 キリスト教を再びこの地にもたらした人であり、在位は 633-642 A. D. である。この教団と聖アウグスティヌスが Kent 等の南イングランドにもたらしたキリスト教団とが 663 年 Whitby で行なわれた宗教会議で論争して前者が敗れたことは、イギリス宗教史上重要な事件である。この教会はそもそもローマ・ブリトン系の教会であることは特記すべきであろう。)

祭りの内容を RB. に従って略述すると以下のとおりである。

準備(1) 祭りを控えた木曜日の日没後に、農夫、農婦、聖堂番(verger)達によってその日刈り取られた大量の rush (灯心草、日本の藺草の類) や reed (芦の類) が教会内部に搬入される。

準備(2) 金曜日の朝9時から夕方6時まで、この1年間倉庫に仕舞いこまれていた Traditional Bearings と呼ばれる高さ3, 4メートルの様々な意匠の木製 pole (蛇が巻き付いたもの、St. Oswald A. D. 642 などの大きな文字が付いたもの、heart 型のもの、またいわゆる Celtic Cross, Peace の字のもの、Maypole と同じ形のものなど) に、教会から rush を持って来て(その残りは教会の床に敷きつめられる) Bearings や pole を素材が見えなくなるほど巻き付けて固着する作業が、村の老若婦人達によって行なわれる。作業場は牧師館に隣接する Tithe Barn であるが、この倉庫自体昔教会に農民達が収穫物の10の1(tithe)を納めたものを収納する倉であって、古い教会の制度の遺産である。

Bearings 以外に、Rush Sheet と呼ばれる4×2メートルほどのリネン布に rush, reed, flower を縫いつける作業もある。作業は同時に村の婦人達の楽しい語らいの場であるが、毎年のこととて熟練した女達は楽しい談話を楽しみながら、この Bearings に巻いた草が行動の途中でほぐれたりしないように注意を怠らない。しかしこの作業は全曜日に全て完了するものではない。翌土曜日の早朝摘んできた野の草花を取り付けて始めて仕上がるのである。

Day One: 土曜日の午後に Rushbearing Procession が始まる。教会の Service は日曜日で本祭りのはずであるが、その前日に中心行事が殆ど集中することは、日本の宵宮祭の賑やかさと共通するものがある。この点についてパンフレットは古代アイルランドや北イングランドの習俗である前夜祭——Lancashire の古方言で Country Wake と呼ぶ——との関連に触れているが、現在でも Ireland で死者の葬式の前夜に親戚縁者が集まって飲めや歌えの大宴会になるとあるいは関わりがあるのかも知れない。これも英語では Wake と表現される。

さて土曜日になると、Rushbearing Procession (一種の parade である) のなかで何らかの役割りに当たっている以外の子供達は、それぞれ自作の小さな bearings を手にして、教会の横手の川(River Rothay)にかかる橋から教会の門まで壁に沿って堵列する。小学校(教会から川向かいの遠からぬところにある)の校長先生が子供達に tea-ticket 一枚と5ペンス銅貨一枚を配ってある。この券は午後に St. Oswald の印のついた ginger-bread と交換さ

れ、また夕方の *feast* に招かれるときの入場券ともなる。

いっぽう牧師館の芝生では、行列の中心となる *Rush Sheet* を捧持する *Rush Maidens* と呼ばれる 6 人の少女（3 名は小学生、3 名は卒業生）が、白いブラウスと緑のジャンパースカート（教会の支給品）と白の *socks* と *shoes* という服装で集まり、彼女達の髪にも *rush* と花の飾りをつけている。*Sheet* を持つ手の反対の手には矢張り *rush* が握られている。*Rush Maiden* に選ばれるのは少女達にとって最上の光栄とされるが、続けて 2 年選ばれることは決してない。後述の五月祭の *May Queen* と相通ずるものが感じられよう。

Traditional Bearings（教会用正式 *Bearings*）を捧持するのは少女とは限らない。少年達は聖職服（*cassocks*）の上にこれも聖職者用の短かい白衣（*surplice*）を着る。その他年長の少女によって支えられた *Maypole* を運ぶ 9 人の幼女（5～8 才）、聖職者達（この教会ばかりでなく、*Catholic* も *Methodist* も加わる、いわば村ぐるみの祭りである。）、教会旗の旗手など行列の要員達が待つほどに、小学校から *the Band of Lake School* が *Rushbearing March* を奏でながら行進して来て、それに上記の列が続いて村のほうに歩き始める。それまで道端で見ていた村の大人も子供もこの後尾にワイワイガヤガヤと続くが、それぞれ自作の *bearings* を携行している。行列は何度か立ち止まって後尾の群衆が遅れないようにしなければならない。これが *Rushbearing Procession* である。（日本の祭り行列に似ているが全員が加わるころがなかなか興味深い。）

この行列が定められた巡路に従って村を一巡して再び教会に戻ってくる頃には、教会の床に *rush* が敷きつめられて緑一色になり、新鮮な *rush* の香気が充満している。一巡して来た *Traditional Bearings* は祭壇近くに並べられ、村人自作の小さなものは入口近くの棚に並べられ、それから *Rushbearing Service* が始まる。そのあと 9 時までには子供も参加してお祝いの *feast* になり、9 時以後は大人だけが残って大人だけの *feast* になる。これは深更に及ぶのである。主な会場は *Red Lion* 亭という *Pub* に近い納屋である。当然その *Pub* も大賑わいとなるであろう。

Day Two：この日は *Sunday Service* であるが、やはり *Rushbearing Service* であって、*rush* の香気のなかで行なわれ、*Collect*（短かい祈禱文）も *hymn*（讃美歌）もこの祭り独自のものである。1841 年この教会が板張りの床になるまでは、年中 *rush* が敷かれていたらしいが、以後はこの日だけになったらしい。この *rush* は月曜日の午後までには取り払われて、翌年のこの時季まで平常の姿になっている。（年中敷かれていた理由はあとで述べたい。）

Day Three：後祭りというべきこの祭りは月曜日の午後子供たちだけで行なわれる。子供達は自作の *bearings* を教会から持って小学校の校庭に行く。そこで世界的に有名な（*world-famous* と *RB.* に記されている）*Grasmere Sports* の子供版と言うべき *game* に打ち興じる。たとえば *Cumbria and Westmorland Style Wrestling*, *Fell Race*（一種の *cross country*）など古式豊かなスポーツの *miniture* 版を楽しむのであるが、ここにも日本の奉納相撲、ギリシヤの *Olympic Games* を連想させるものがある。祭りのパターンは古いものほど世界共通なのではないのだろうか。

教会行事とはいいい乍ら、そのキリスト教の教義によるよりも、より民俗的、習俗的な行事であり、異教的な印象が強いことは否定し難く、*RB.* もこの点を否定せず、むしろ誇示している印象を与える記述もある。この点をつぎの節で考察して見たい。

3. *Rushbearing* の異教性

前節でこの行事の異教性に関する言及がこのパンフレットに存在することを指摘したが、こ

れに入る前に、この行事の年代による変遷を概観してみたい。

(1) 1789年 James Clark が書いた “Survey of the Lakes of Cumberland, Westmorland and Lancashire” の記述では、「9月の終り頃に、殆ど村中の若い男女が丘に集まって rush を刈り集め、それを教会に運ぶが、娘達から選ばれた the Queen がその先頭に立ち、手に大きな花環を持ってそれを説教壇に置く。他の者は rush を床に撒き、そのあと楽師達に先導されて the public house に行き、その夜を様々なひなびた娯楽で過ごす。」とある。

(2) 1818年 Benjamin Newton の日記では、「会衆の席を rush で散りばめるのは古くからの習慣で、毎年 tithe (10分の1税) の羊毛が集められた日の翌日に行われて、その夜は inn 所有の納屋で歌い踊って夜を過ごす。」とある。この日記の日付は7月24日となっている。

(3) 1827年 A Pedestrian による無署名の記事では、「子供達は美しい溪谷が育てた野の草花の花環作りに忙がしい。それは夜9時に始まる Procsson にそなえてのことである。」となっていて、現在の形式・内容に定まったのは1885年のことであるらしい。またより古い時代には、現在の Traditional Bearings よりも大きな柱が rush や花に飾られて運び込まれたらしく、運び手も成人の男女であったようだが、Traditional Bearings になってからは主役は子供ということになった。とも記述されている。

上述のようにこの行事には、時には古代からの農耕儀礼のひとつである収穫感謝祭に類似したり、またゲルマン、ヨーロッパに広く行なわれる5月祭を思わせたり、あるいは夜が本当の祭りである古習俗の姿をとどめたり、花祭りにも通ずるものがあったりして、この地方が古代ヨーロッパ文化圏の外にあったのではないことを示唆している。(Maypole についてはあとでさらに触れたい。)

RB. において直接この行事の異教性を指摘する文言を引用すると、まず第1ページの由来に関する記述のなかのつぎの文が眼に触れる。

... It is possible that the Rushbearing ceremonies are a relic of the Roman Floralia, may be of even older origin. ⁽²⁾

(Rushbearing の儀式は Roma の花祭りの名残りかも知れないし、あるいはさらに起源が古いのかも知れない。)

Rome から僻遠の地である Grasmere の祭りについての上の記述は突飛に見えるが、この地は Ireland を経由したキリスト教の影響下にあって、英国に於けるキリスト教の正統確立(663年)以後もしばらく Rome-Briton (ローマ化された Celt 系 Briton 族) 教会の影響下にあったと思われるのだから、決して根拠がない訳ではない。現に St. Oswald はローマ・ブリトン系教団の戦士であったのだから。

また Rushbearing Service で歌われる讃美歌にすらその異教性を示す句がある。

.....

Though generations pass by	時と世すぐれど
And still our old traditions flow	われらの古き伝統は、
From Pagan past and Roman day. ⁽³⁾	異教とローマの時代より流る。

だがこの古い行事が古代からの民俗的行事であることを示唆する反面、この行事が教会の現実の need に応ずるものであることを示す記述も見られる。

At Grasmere, not only was the floor of the church of earth until 1841, but bodies of parishioners were buried under the feet of the worshippers until 1823. It was vitally important that the atmosphere of the church be kept fragrant, therefore; which makes it highly likely that fresh rushes were laid on the floor not only at the Rushbearing on St. Oswald Day (5th August) but at regular intervals in the meantime also.⁽⁴⁾

(Grasere では1841年まで教会の床が土であったばかりでなく、1823年まで教区民の遺体が会衆の足下に埋葬されていた。従って教会の空気が香気で充たされることが不可欠であった。そのために新鮮な rush が8月5日の St. Oswald Day ばかりでなく年中定まった間をおいて床に敷かれたことはおおいに考えられ得ることである。)

とあるように、rush の香気（それは日本の新しい畳の香気と同じであろう。）が教会の浄化に用いられたことが示されているが、このことはこの教会ばかりでなく広く行なわれたことであり、London の St. Margaret's, Westminster（現在でも Abbey に隣接している有名な教会である）ほか2、3の教会の古い支払台帳にその購入代金が記帳されていると述べている。

だがもし仮りにこの行事が単に上記の教会の need に応ずるだけのものであったならば、その need が失われた時、すなわち教会の床が土間でなくなった時に消滅するはずである。事実他の教会ではもう消滅している。しかし1841年に Grasmere の教会にその need がなくなった以後も現在に至るまでこの祭りが残っているにはそれなりの理由がある筈である。もはやその理由は教会の宗教活動上の need に根ざすものではなく、村人側の need、それも rush, reed などの植物に対する村人の感情に根ざしたものであると想像するに難くない。古代農耕民族に共通する植物崇拜の感情の relic をここに見出すことは、既に述べた Maypole の存在や、収穫感謝の農耕儀礼の relic の存在や、この祭りの主役に若い、あるいは幼ない女性が多いことなどを考え合わせると、否定でき難いことである。現在でもこの行事に Maypole が加わり、年上の女性によって支えられた小型の Maypole が9人の幼女達によってそれぞれ上端より下げられたテープを持って運ばれるのである。

Maypole が古代ゲルマン・ヨーロッパの樹木崇拜の名残りであり、まったくの異教的風土に発生したことは、つとに J. G. Frazer の *The Golden Bough* に指摘されているが、とくにイギリスに於ては、清教徒的な著述家 Phillip Stubbes の Elizabeth 朝期の Maypole の行事について嫌悪感を露わに示した文を引用して、この異教性を証明しようとしている。

Against May, Whitsonday, or other time, all the yung men and maides, old men and wives, run gadding over night to the woods, groves, hils, and mounteins, where they spend all the night in pleasant pastimes; and in the morning they return, bringing with them birch and branches of trees, to deck their assemblies withall. And no mervaille, for there is a great Lord present amongst them, as superintendent and Lord over their pastimes and sports, namely, Sathan, prince of hel. ... And then fall they to dunce about it, like as the heathen people did at the dedication of the Idols, whereof this is a perfect pattern, or rather the thing itself.⁽⁵⁾

(5月、聖霊降臨祭その他の時期に、若者、乙女、老人、人妻、すべての者達が一晩じゅう林や森や山を遊び歩き、そこで楽しく打ち揃って夜を明かす。そして朝になると樺

その他の樹の枝をたずさえて、集会の場を飾るために帰ってくる。ところで彼らのなかには、その楽しみと遊びの支配者あるいは王としての大神が、すなわち地獄の王サタンがいる。……こうして一同がそれ (Maypole) を取り巻いて騒々しく踊るのであるが、このさまは偶像奉獻の際の異教徒たちに似ており、全くその様式どおり、あるいはむしろそのものと言ってよい。(この記述のあとに、この夜処女の殆どが処女でなくなるということを指摘している。)

この行事を異教的と極めつける清教徒的感覚を持っていない点では、イギリスの他の地方も変りはないだろうが、ことさらに教会行事として行なわれていることが Grasmere の Rush-bearing の特質と言えよう。教会行事と異教的民俗的行事とがまったく習合し切って何らの違和感を持たないのが、この村の住民感情なのである。

さらに RB. の記述のなかで注意を惹くのは、所載の hymn のひとつ *Hymn for St. Oswald* が異教の土地であった Northumbria をキリスト教化した Oswald を讃美しながら “within a shrine” という語句を用いていること、またもうひとつの hymn, *Hymn for the Rushbearing* に於ても “at St. Oswald’s shrine” と、shrine の語が用いられていることである。本当に Oswald 王がこの教会に埋葬されているのであればともかく、もしそうでなければこの語を“教会”の意味で用いるのは、いささか奇異である。OED によればこの語は Latin 語の「箱または櫃」であり、「聖なる遺物を収めた櫃」から「死者を収める棺」に移り、そのあとにはじめて「a temple, church」が示されるが、用例にはキリスト教のものがなく、ローマ・ギリシャ神話の神々に適用されている。そしてその用例の1905年のものとして、

The position of the Church, like that of all ancient Shrines in England, was chosen and fixed on certain principles.

(Church の位置は古代イングランドのすべての Shrine と同様にある基準に基づいて選ばれ定められた。)

とあって、もともと英国に異教的な Shrine が存在していたことを暗示している。なお北英・北欧の Church に当る語に Kirk というのがあるが、RB. には全く見当たらない。この地が Rome-Briton の地であったことから判断してローマの異神を祀る Shrine (L. scrine) の語がこの地に残っているのかも知れない。

ちなみにこの地が Ireland 系キリスト教の地になる前、あるいはなってから後でも、古代ケルトの宗教 Druid の地であったことはつぎの Wordsworth の文でも指摘されている。

When the Romans retired from Great Britain, it is well known that these mountain-fastnesses furnished a protection to some unsubdued Britons, long after the more accessible and more fertile districts had been seized by the Saxon or Danish invaders. A few, though distinct, traces of Roman forts or camps, as at Ambleside, and upon Dummallet, and a few circles of rude stones attributed to the Druids, are the only vestiges that remain upon the surface of the country, of these ancient occupants; ...⁽⁶⁾

(ローマ軍が英本島から撤退したあと、この山岳地の堅固さが、より入り易く肥沃な土地がサクソン、あるいはデューンの侵入者に占領されたずっとのちまで不屈のブリトン人に防御のとりでとなったことはよく知られている。Ambleside や Dummallet に少

数だがはっきりしたローマの防塞やキャンプの跡があり、また Druids のものとされる
ごろ石のサークルが先住民がこの地の表面に残した唯一の名残りである。）

Lake District はその地形の険しさと、土地の不毛性のゆえに、外からの勢力や文化に影響
されることが遅く、古来のものと新来のものとが重複して存在したこと、そして新しいもの
が古いものと習合する形で入らざるを得なかった土地であったと思われる。（後述のごとく近
代科学の所産である鉄道もすぐには入れない秘境だったのである。）

Wordsworth の *Selected Prose* のなかで、この地方を Swiss Alps と比べているが、
この地形から言ってもさながらひとつの独立国の様相を具えていることを、つぎのように表現
している。

... a Perfect Republic of Shepherds and Agriculturists, among whom
the plough of each man was confined to the maintenance of his own family,
or to the occasional accommodation of his neighbour.⁽⁷⁾

（羊飼いと農民の完全な共和国、彼らのあいだでは、各人の農耕は一家の扶養と、時折
りの村落の費用を支えるためののみに限られていた。）

1844年 Kendal までの鉄道が Windermere まで延長される計画が明らかになると同時に、
Wordsworth は新聞に寄稿して猛烈な反対を表明した。Lake District の独自の自然と文化
が近代文明に毒されるのをひどく恐れたのである。この努力もむなしく Windermere まで鉄
道が敷かれたのはその3年後だったが、ここから奥にはついに鉄道が延びることなく今日（こ
んにち）に及んでいるは、彼の願いに応えるものである。

だが文明の波は容赦がない。motorization とともに、鉄道に代わって道路の建設や整備が
進み、国内外の観光客が集まってきて、俗化の嘆きも聞かれるが、いったん幹線を100メー
トルも離れば、人の心も自然の姿も原始の純朴を失っていない。だがこの美しい高地と谷と
湖の神秘性にまた多くの人々が魅せられて集まる。秘境と呼ばれる土地はつねにこの宿命的な相
克に悩まされる。詩人もその悩めるひとりであった。

この地域の人の樹木崇拜の感情に詩人が注目をしたことは、つぎの記述にも窺われる。

Rydal Mount, October 12th. 1844

The degree and kind of attachment which many of the yeomanry feel
to their small inheritances can scarcely over-related. Near the house of
one of them stands a magnificent tree, which a neighbour of the owner
advised him to fell for profit's sake. 'Fell it!' exclaimed the yeoman, 'I
had rather fall on my knees and worship it.'

(*Selected Prose*, pp, 76~77)

（自由農民の多くが祖先伝来のささやかな財産に抱く愛着の程度と質は、いくら誇張し
ても過ぎることではない。ある Yeoman の家の近くに巨木が立っていた。所有者の隣人
が利益を得る目的で伐採したらとすすめたところ、'切るだって！俺はむしろその前
に膝まづいて拝みたいくらいだ、'と叫んだ。

Wordsworth のついの栖（すみか）となった Rydal Mount の広い庭園を歩き、ここかし
こにそば立つ樹木を見れば、詩人の自然に対する崇敬と愛着が痛く伝わってくる。かれ自身も

古代の樹木崇拜を心底に抱いていた人間だったのである。

柳田国男博士が民間伝承の研究に開眼したのは1908年と考えられるが、イギリスに於ても victoria 末期であった。Walter Pater がつぎの文のなかで、キリスト教に蔽われたヨーロッパの底流としての異教を指摘したのは、1873年刊の *The Renaissance* に於てであった。

Still, the broad foundation, in mere human nature, of all religions as they exist for the greatest number, is a universal pagan sentiment, a paganism which existed before the Greek religion, and has lingered far onward, into the Christian world, ineradicable, like some persistent vegetable growth, because its seed is an element of the very soil out of which it springs. ⁽⁸⁾

(さらに、単なる人間の性格のなかに於ても、最大多数のために存在するすべて宗教の広汎な基盤は、世界にあまねき異教的感情である。それはギリシヤの宗教以前にも存在し、さらに後世に生きてキリスト教世界に至り、根強い植物の生育の如く絶やし難い異教性である。なぜならこの種子はそれが育つ土そのものの要素だからである。)

Lake District もこのような異教性が育つ土を持っていたのであろう。

4. Rusbearing と Wordsworth

この節では、RB. の記述をもとに、教会や村民から見た、Wordsworth の Rusbearing のなかでの位置を見ていきたい。さきの1827年の記事に引きつづいての文が記されている。

In the procession I observed the 'Opium Eater', Mr. Barber, an opulent gentleman residing the neighbourood ; Mr. and Mrs. Wordsworth, Miss Wordsworth, and Miss Dora Wordsworth. Wordsworth is the chief supporter of these rustic ceremonies. ⁽⁹⁾

Opium Eater は周知のごとく Thomas de Quincy のことで、かれは1808年から1830年まで Dove Cottage を Wordsworth から借り受けて住んでいた。Miss Wordsworth は詩人の妹で最大の友でもあった Dorothy, Dora は詩人の愛娘である。この人達が行列に加わって歩いている光景は微笑を誘うものであったろう。chief supporter なる語は意味深い、精神面だけではなく、財政面でも援助者だったのではなかろうか。現在と違って貧しい村であった当時ならば考えられ得る。

RB. はさらにこの祭りを歌った詩人の作品を紹介している。Rural Ceremony (1821) である⁽¹⁰⁾。

Rural Ceremony

by William Wordsworth

Closing the sacred Book which long has fed
Our meditations, give we to a day
Of annual joy one tributary lay;
This day, when, forth by rustic music led,

The village Children, while the sky is red
 With evening lights, advance in long array
 Through the still churchyard, each with garland gay,
 That, carried scepter-like, o'ertops the head
 Of the proud Bearer. To the wide churchdoor,
 Charged with these offerings which their fathers bore
 For decoration in the Papal time,
 The innocent procession softly moves: —
 The spirit of Laud is pleased in heaven's pure clime,
 And Hooker's voice the spectacle approves !

(我が思い養い来し聖書を閉じ、
 年ごとめぐるよろこびの
 この日に我が歌を捧げん。
 この日、夕茜を身にうけて、
 村の子ら、楽師に導かれ、
 美しき花環を手手に、
 列長々と墓地のしじまを通り、
 王笏のごと、誇らしく持つ Bearer に、
 従いつつ進む、教会の広き門に向かいて。
 主の礼拝に飾りとせんと、集まれる
 捧げものに埋めつくされたる。
 天上のきよらのあたり
 讃美の心みちみちて
 Hooker の声、このすがたうべなう。

詩のなかで Laud はやゝ疑問がある。Lord ならば容易に解釈され得よう。また Hooker も一筋縄ではない。hooker=hook する人、で意味をなさない。大文字に従って固有名詞・人名であろう。前後の関係、またこの Sonnet が英国教会史を主題とする Sonnet 集の一首であることを考慮に入れると、16世紀後半に英国国教会 (Church of England) の理論的基盤を作った神学者 Richard Hooker (1554? -1600) とすれば一番辻褃が合うのだが、今のところ判断を保留しておきたい。

仮りにそうだとすれば、Wordsworth 自身この行事の正統性に不安があったので、Hooker の声を借りてこの異教性を正統化しようとしたという仮説も立てられよう。さらに研究を深めたい点である。

RB. p. 14 につぎの記述がある。

... and perhaps the shades of Wordsworths and Coleridges and de Quincys and Southseys and of countless far more ordinary folks will once again take a special delight in another 48 hours of rustic joy."⁽¹¹⁾

(そしておそらく Wordsworth, Coleridge, de Quincy, Southey 家の人達やその他もろもろの名もなき人達の精霊が、ふたたびこのひなびた48時間の楽しいうたげに加わるだろう。)

さきに挙げた Hymn for the Rushbearing にもつぎの数行で言及されている。

Beside the church the poets sleep,
 Their spirits mingle with our throng,
 They smile to see the children keep
 Our ancient feast with prayer and song.

(聖堂のかたわら、詩人達眠る
 その霊、われらの集いにまじりて
 子ら、祈りと歌をもちて
 古きうたげするを見てほほえまん。)

RB. のこのような記述を読んで感銘を受けることは、この編者（多分聖職者あるいは教会関係者だろう）と村人達の、Wordsworth に対する深い敬慕の念である。またこの偉大な詩人によって Rushbearing が支持されたことに対する高い誇りの気持ちである。Wordsworth とかれをめぐる詩人達の思い出が続くかぎり、この祭りはいつまでも行われ続けるであろう。

5. Wordsworth と Rushbearing

前の節では Rushbearing の祭りのなかで詩人がいかに位置づけられていたかを、RB. に拠って述べたが、この節では Wordsworth の詩の思想に於ける Rushbearing の位置づけを考察して見たい。その前に詩人の詩の思想に触れる必要がある。ところがそのもっと前に彼の年譜に拠って詩人の精神的遍歴を辿る必要が生まれてくるので、まずこれから始めたい。

詩人の精神史

1 期（自然児の時代）1770年 Lake District 北部 Cockermouth に生まれ、17才になるまで奥深い高地の自然に包まれのびのびと育った。Hawkshead の小学校時代も自由放任主義の教育下で屈曲することはなにひとつなかった。幼いうちは、山や谷、川、湖などの自然は畏怖の対象でもあったが、長ずるにつれて自然に対する美意識も成長し、それらに organic pleasure を感ずるようになった。詩人の原点は自然に対する畏怖と喜びだったのである。

また1才年下の妹 Dorothy との無邪気な遊びと交わりから、後年 Wordsworth の詩人としての成長を支える深い理解と同情が育っていった。

2 期（ケンブリッジ）1887年、父のない彼に対する伯父達の支援によって Cambridge の St. John's College で学ぶことになった。将来が開けてきたのだが、かれは故郷の自然を無心に享受する感受性が失なわれないように、よく故郷に帰って村人と交わったといわれる。

3 期（革命青年時代）この3年間は短かい期間であったが、詩人にとって Sturm und Drang の時代であった。まだ自分の才能と進路を見出せなかった詩人は、まずフランス語を学ぶべく渡仏して Orleans に主として滞在したが、フランス革命の激動期に直面して共和主義者になった。また、たまたま自分のフランス語教師となった4才年長の Marie Annette Vallon と恋愛関係となり、1792年12月に娘 Anne Caroline Wordsworth が生まれた。しかしこの恋愛は双方の親戚の激しい反対によって実を結ばず、送金も断たれて1793年正月に詩人は London に戻った。その後文通があったらしいが遂に結婚に至らなかった。London での詩人は革命の夢はしばし醒めず William Godwin (P. B. Shelley の妻 Mary の父) の学説にかぶれていたりして、親戚から排斥されたりしていたが、革命の流血と残虐に幻滅して挫折に終わったのである。だがこの時期が終生かれの頭から離れない鬱屈として後半生を支配した

と想像される。

4期 (Lyrical Ballads 前後) 1793年7月1月間 Wight 島に滞在して (どうもこれは表向きで Annette に会いにフランスに行ったという説が有力である) そこから北上 Salisbury Plain—West Country—Monmouth Shire—The River Wye—Tintern Abbey—Wales に至る途歩旅行に1月を費やした。この間に彼の思想的転向と詩心の日醒めがあったらしいが、それから翌年2月まで動静は明らかではない。

1795年9月に Dorsetshire の Racedown に居を定め妹 Dorothy と共に暮したが、たまたま Bristol にこれも挫折の思いを抱いて滞在していた S. T. Coleridge との交遊が始まり、詩人兄妹と Coleridge との日夜を分たぬ交わりのなかから、19世紀文学への大きな道標となった *Lyrical Ballads* が1798年9月に刊行されたのである。Wordsworth にとっても、Coleridge にとっても、この3年間は anni mirabiles (the wonderful years) となったのである。

5期 (Goslar 時代) *Lyrical Ballads* 出版直後、Coleridge とともにドイツに向かい、そこで別れて詩人は Goslar に赴きそこに約半年滞在する。この時期に幼児を題材にした詩を多産する。Lucy Gray, その他所謂 Lucy poems などであるが、これらの詩は詩人の詩想の原点を語る重要なものとなる。と同時に、詩人の心が国内外の放浪に終止符を打って、故郷の Lake District に定住することを決定した時期でもある。

第6期 (Dove Cottage 時代) Goslar から帰るとすぐ故郷 Lake District の Grasmere の村外れにある Dove Cottage を求めて定住する。1802年にフランスに赴き Annette 母娘に会って、十分な諒解を得たうえで、詩人兄妹と幼馴染だった Mary Hutchinson と結婚する。この時から Dove Cottage を離れる1808年までが、詩作活動の絶頂期であるとともに、Laka School (湖畔派) の最盛期であった。

第7期 (Allan Bank, Rydal Mount) 1810年詩人は *Description of the Scenery of the English Lakes* を出版したが、この年かれの詩人として名声が低下しはじめ、詩人から郷土の自然と人間を愛してやまない名望家へと転機となった。青年期の共和主義的思想は片鱗もなく、むしろ頑冥とさえ言える保守主義者に変貌したのである。*Rural Ceremony* も保守的な立場で宗教を研究する詩人の作品である。

結論からさきに言えば、小稿で一番重要なのは Goslar 時代の諸作品である。すでに1798年 *Anecdote for Father, We Are Seven* によって大人の常識を超える子供の無邪気を歌った詩人は、ドイツの Goslar に滞在した僅か数ヶ月のあいだに *Lucy Gray* 及び *Lucy Poems* の大部分を書いた。(I traveled ... だけは1801年の作とされる。) *Lucy Poems* 5篇には3つの共通点があるが、それぞれ重要性を具えている。第1点は、題名を持たないことである。従って我々は詩を特定するのに冒頭の1行を以てしなければならない。このことはこれらの詩が1篇1篇完結しているのではなく、折り折りに湧いた詩想を書きとめて将来の大作に結晶させる為の Stepping stones であったのではないか、ということを示唆している。第2点は、そのいづれに於ても Lucy の「死」が明示、あるいは暗示されていることである。それぞれの該当章句を列挙すると、

- (1) Strange fits of passion have I known :

.....

‘O mercy!’ to myself I oried,

‘If Lucy should be dead!’⁽¹²⁾

- (2) She dwelt among the untrodden ways

.....

She lived unknown, and few could know
When Lucy ceased to be;
But she is in her grave, and, oh,
The difference to me!⁽¹³⁾

- (3) I travelled among unknown men,

.....

Thy mornings showed, thy nights concealed,
The bowers where Lucy played;
And thine too is the last green field
That Lucy's eyes surveyed.⁽¹⁴⁾

- (4) Three years she grew in sun and shower,

.....

How soon my Lucy's race was run!
She died, and left to me
This heath, this calm, and quiet scene;
The memory of what has been
And never more will be.⁽¹⁵⁾

- (5) A slumber did my spirit seal;

.....

No motion has she now, no force;
She neither hears nor sees;
Rolled round in earth's diurnal course,
With rocks, and stones, and trees.⁽¹⁶⁾

また *Lucy Gray* も幼ない女兒が母を迎えに出たまま帰らなかった物語詩で、この点で共通している。

第3の共通点は *Lucy Gray* を含めて、その背景は *Lake District* を暗示する荒涼とした山岳地であることである。そのいくつかを挙げると、

Among the mountains did I fee
The joy of my desire; (I travelled ...)

She dwelt among the untrodden ways
Beside the springs of Dove, (She dwelt ...)

While she and I together live
Here in this happy dell. (Three years ...)

She died and left to me
This heath this calm, and, quiet scene; (Three years ...)

Rolled round in earth' s diurnal course,
with rocks, and stones, and trees. (A slumber . .)

Lucy なる女性（あるいは女兒）がだれを指しているかについての論議が行なわれてきたが、万人を首肯させる説はまだ現われていない。むしろ特定不可能なのであって、Lake District の自然のなかで育っていた時代の自身の無垢の魂を象徴していると考えのほうが妥当であろう。そして自分の心を知ること詩人自身に同じと思っていた分身たる妹 Dorothy の魂が、矢張り歌のなかで意識されても、結局は同じことであつたろう。Lucy を歌っていても異性に対する恋慕を感じさせないのもこの故であろう。

Goslar から詩人はあまりあちこちドイツ国内を旅をしていない。かれは本当は留学のつもりでもっと長い滞在を予定だったと思うが、急に鳩が巣箱に戻るかのように帰郷したのは、これらの詩群を産み出すあいだに、これに触発されて自分の帰りゆくところを悟ったからではなかったろうか。このあと詩人はまったく湖畔地方の人になり切ってしまったことを考えると的外れとは言えないであろう。前述の「死」は悲しむべき終末というよりも、無垢のままの完結と考えるべきなのだろう。

Lyrical Ballads 以後1810年頃までの Wordsworth の作品から受ける印象が「素朴な自然と人間を歌う詩人」であるのに反して、1791年から93年にかけてのかれは全く異質な思想と行動の人間であったことは、前述の年譜によっても明らかである。この期間のことについて彼は殆ど口を閉ざして語らない。恐らく彼にとってこの期間のことは思い出したくないほど後味が悪いこと、その後しばらくは心の奥底によどむ苦汁だったのではないだろうか。その感情は「われ故郷を出でざりしならば」と言えよう。そして改めてその救済を故郷とそこに住むひとびとに求めたと考えられる。後半生の詩人が保守的に過ぎるほど保守的になり、後進の浪漫派詩人をして the lost leader と嘆かせたことが、このことを証しているのである。

やがて詩人のこの鬱屈した心情は、1803年から6年に至る4年間の刻苦のすえ、代表作 *Ode: Imitations of Immortality from Recollections of Early Childhood*⁽¹⁷⁾ に結実するに至った。このなかでも、詩人は幼時の無垢な眼に映じた自然の至福の光が、浮世の経験にまみれて汚れてしまった空虚感を嘆く章句が散見される。まず冒頭の Stanza は嘆きそのものである。

There was a time when meadow, grove,
and stream
The earth, and every common sight,
To me did seem
Apparelled in celestial light,
The glory and the freshness of a dream.
It is not now as it hath been of yore; —
Turn wheresoe'er I may,
By night or day,
The things which I have seen I now can see no more.

(牧場も森も流れも

大地も、はた、眼に触るるものすべて、

わが瞳には、

天上の光に包まれて、

夢さながらの輝やきとあざやかさに

蔽われし時ありき。
 されど今は昔と異なりて、
 夜にても昼にても、
 いづくを向くとも、
 かつて見しもの、見ること能わず。) ⁽¹⁸⁾

But yet I know, where'er I go,
 That there hath past away a glory from the earth. ⁽¹⁹⁾
 (されど、今われいづくに行くとも、
 栄光は地上より消え失せしことを知る。)

Whither is fled the visionary gleam?
 Where is it now, the glory and the gleam? ⁽²⁰⁾
 (幻影の光は何処に消え去りしや、
 栄光と夢はいまいづくにありや。)

詩人は幼ない時無垢の心に映じた自然の至福の光に再び浸るべく心を尽くすが、経験に汚れた大人の心にはそれを阻むものがあって思うに任せぬことを焦慮煩悶するのである。この Stanza IV までが1803年の作で、V以下その完結は1806年まで待たねばならない。何とか満足できる解決に3年を要したのである。

Stanza VII の冒頭で A six year's Darling of a pigmy size! と S. T. Coleridge の長男 Hartley が歌われ、Wordsworth と Coleridge の交情がいまだに篤かったことを示している。これから4年後1810年にふたりは絶交に近い状態になった⁽²¹⁾。

Stanza VIII でもまだこの幻滅と虚無感が続いている。

.....

Thou little Child, yet glorious in the might
 Of heaven-born freedom on thy being's height,
 Why with such earnest pains dost thou provoke
 The years to bring the inevitable yoke,
 Thus blindly with thy blessedness at strife?
 Full soon thy Soul shall have her earthly freight,
 And custom lie upon thee with a weight,
 Heavy as frost, and deep almost as life! ⁽²²⁾

(みどり児よ、存在の高き地位にありて、
 天より授かる自由の力に輝けるに、
 何すれぞ、切なる苦悩を味わいつつ、
 愚かにも汝の幸福とたたかい、避け難き
 束縛をもたらす歳月を刺戟せんとするや。
 やがて汝の魂は浮世の重荷を負い、
 習慣は霜のごとく重く、生命のごとく根深く。
 いとも重く汝の上に蔽いかからん。)

しかし IX にはいると、詩人は「永遠」より生れて来てその大海の岸边に戯れる幼児ばかりではなく、大人も「永遠」を記憶の力を駆って想起できその光に浴し得ると説き始める。

O joy ! that in our embers
Is something that doth live,
That nature yet remembers
What was so fugitive !

• • • • •

Hence in a season of calm weather
Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,
And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore. ⁽²³⁾

(われらが生命のもえさしのなかに、
なお生けるもの存し、
自然がかくもかくもうつろい易きものを、
忘れざることば欣ばし。

• • • • •

されば静かに晴れたる季節に、
遙か内陸にあるとも、われらの、
魂は、われらをこの世にもたらせし、
不滅の大海の光景を眺め、
つかの間にそこに走りゆき、
磯辺に戯むる幼児を眺めて、
永遠にまき返す波の轟きを聴くなり。)

上の句のなかで Children と大文字で書かれているが、*Rural Ceremony* でも同じ扱いをしている。Rushbearing procession のなかで村人たちとともに歩く Wordsworth の心情は、まさに上の 7 行に歌われた心情と同じものではなかっただろうか。この祭りの日は詩人にとって束の間の a halcyon day で魂の洗われる日だったと思われる。この思いは、浮世の俗事に忙殺される詩人のつぎの行、

— Great God ! I 'd rather
A Pagan suckled in a creed outworn ; ⁽²⁴⁾
(——おお神よ、あゝむしろわれ
古びたる信仰に育くまれし異教徒たらん。)

に相通ずるものが感じられる。

詩人はそれまで幼児に向けていた眼を一転して将来に向け、「死をつうじて永遠を見る信仰のうちに」「かつて輝かしかったものを見ることができる。」と老境にも幼児に近い喜びを見得ることを語り、最後の stanza で、

(谷川の流にも似て軽やかに歩き廻れる
幼なきにまして、われは河床をゆく谷川の流れをめずる。
新らしき太陽の無垢なる輝きは、
昔ながらに愛らし。
落日をめぐりて、集える雲は、人生のはかなさを見し眼に、より沈着の色を帯びる。
われひとつの試練を経て次の勝利を得たり。
われらの生きるよすがなる人情に感謝し
その慈悲、喜悅恐れにも感謝す。
いともささやかなる一茎の花も、しばしば、
涙にあまる深き思いをわれに与うる。)

すでに述べたように Rushbearing の祭りに喜々として加わる子供達の姿に詩人は言葉に尽くせない共感と安らぎを見出したことは、容易に想像できるが、かれに共感を抱かせた要素はこれだけではなかったと思う。人間のもっとも無垢の姿は個人の次元では幼児に見られるが、集団の次元では、人類の黎明の時代、すなわち古代の世界、Christianity 以前の異教的な素朴の時代である。この意味では Rushbearing は幼児の素朴と古代人の素朴とが overlap して、しかも古代の自然の名残りを残す Lake District の自然を背景に、その所産である水草（これはここの高原の湿地の象徴でもある。）をもって行なわれる、primitiveness の凝結で

ある。これは Wordsworth もその鋭い感覚で感じ取ったことであろうし、村人も詩人のその心を感じ取ったであろう。

6. 原始への憧憬

人類の歴史は進歩の歴史である。人類始まってから、まず火を使うこと、言語を使うこと、道具を使うことを知って万物の霊長となつて以来、どの分野、領域に於ても進歩に次ぐ進歩を続けて現代文明に至っている。その進歩はルネッサンス後中世的な統一思想の軛を脱してよりますます加速されてきたが、それはさながら C. Marlowe や Goethe の Dr. Faust(us) の「すべてを我が手に収め」ようとする姿にも似ている。

その反面、人間はいつも心の深層に原始への憧憬を秘めているものである。とくに芸術でこの前進の衝動と原始への衝動との相克がもっともよく現われる。

たとえば、John Milton の *Paradise Lost* は清教思想を表白するものでありながら、その裏面は樂園喪失の elegy である。その源泉である旧約の創世紀は人間の魂のそもそもの住居は Eden なる無垢の園にあったこと、そしてそこへ回帰がそれから発する宗教の根元的な思想だと思われる。「神々は死んだ」の Nietzsche も至福の島への船出の Aphorism で彼の哲学を語り、Walt Whitman の *Passage to India* も人類の始源であり無垢の象徴でもある India への回帰の船出を歌うものである。違った動機と次元で D. H. Lawrence も原始への回帰への渴望を彼の文学で示した。ギリシヤ神の Prometheus と Pandora の物語も人間の智慧の進歩が同時に墮落と苦悩をもたらすことを物語っている。

Wordsworth にとって、フランス革命と共和主義は Pandora の筐であった。これがために詩人は Lake District で育てられた無垢の世界の光輝を失なったのである。かれの後半生はその世界の至福の光に再び浴しようとする魂の帰郷の努力に終始したと言ってよい。このために彼は固陋な保守主義者と呼ばれることも（事実そうだったのだが）意に介するところではなかったであろう。

Wordsworth が1850年に歿してから16年後に London の富裕な中流家庭に生まれ、教育にも恵まれて育ち、*Peter Rabbit* などの愛すべき物語を書いた Beatrix Potter(1866-1943) は、Lake District に魅せられたあまりに、その収入をもって Lake District の Sawrey (Windermere 湖の近く、Bowness の反対岸にある) の Hill Top Farm などを購入し、1913年47才で地元の弁護士 William Heelis と結婚し、その後一生ペンを持たずひとりの農場主として労働に明け暮れた。この間終始 Lake District の自然保護を頑くなまでに唱え、頑固な気むずかしい老農婦に変貌した。まさに一世紀遅れてきた Wordsworth といった感がある。彼女の農場 Hill Top Farm も、Wordsworth のふたつの旧居と同じく丁寧に保存されて、特に *Peter Rabbit* フアンがよく集まるところになっている。Lake District にはそれだけの魅力あるいは魔力があるようである。機会があれば何度でも訪れて歩き廻りたい土地である。

7. あとがき

拙ない論文、論文というよりも学生のレポートに近いものだが、三上日出夫先生のご退任記念号に先生の研究領域である植物にいささか関わりがある文を寄せることができたのは望外の幸である。35年に亘る先生の御交誼に感謝の意を表するとともに、今後のご健康と清福を心からお祈りするものである。

なお祭祀に於て水草の類が土地を聖別したり清浄化する力を持っていることをもっともよく

知っているのは日本人だと思う。植物に対する崇拜の感情を日・英比較して見たかったが、短日月では難かしいと知ったので、この文では除外した。この点で参考に読んだ書物があるので付記しておきたい。

金井典美：湿原祭祀 ものとなりの文化史 No. 24（東京，法政大学出版局，1977）

また Rushbearing が Rome 起源かも知れぬという記述に関して言えば、イングランド、スコットランド辺境民謡の Thomas the Rhymer やアイルランドのアッシーン Oisín の伝説を歌った詩などが、日本の浦島伝説と同じ要素を含むことについて土居光知氏が「神話・伝説の伝播と流転」（土居光知著作集第3巻，岩波）のなかで、中央アジアからローマにきた徴兵が、ガリア遠征でイギリスに駐屯していたことから、同じ源からこの伝説が東は日本、西はヨーロッパまで広まったという伝播説を唱えている。これに比べると、Rome と北イングランドは指呼の間なのかも知れない。

1989（平成元年）2月28日脱稿

Notes and References

- (1) このあたりの事情については、Raine, Kathleen : Coleridge, *Writers and Their Work* No. 43 (London, Longmans, 1953) と由良君美：ディアロゴス演戯（東京，青土社，1988）に詳しく述べられている。
- (2) *Rushbearing in Grasmere*, p. 1（以下このパンフレットを RB. と略記する。）
- (3) *ibid.*, p. 21.
- (4) *ibid.*, p. 2.
- (5) Frazer, J. G., *The Golden Bough*, Part I The Magic Art, Chap. 10 Relics of Tree Worship in Europe (London, McMillan, 1976) pp. 66~67.
- (6) Wordsworth, W., Description of the Scenery of the Lakes. *Selected Prose* (Penguin © 1988) p. 33.
- (7) *ibid.*, p. 43.
- (8) Pater, W. ; Winckelmann, *The Renaissance* (New York, Boni & Liveright, © 1919) p. 167.
- (9) RB. p. 5.
- (10) Wordsworth, W. ; Ecclesiastical Sonnets, Part III, XXXII, *Poetical Works* (Oxford, Oxford UP. 1987) p. 352.
- (11) ここで言う Coleridge は父 Samuel Taylor よりも長男 Hartley のほうが意識されているかも知れない。既に述べたように、かれの墓はこの教会の churchyard に現存している。ちなみに父の墓所は London 北郊の Highgate の St. Michael's Church にある。
- (12) *Poetical Works*, p. 86.
- (13) *ibid.*
- (14) *ibid.*
- (15) *ibid.*, p. 148.
- (16) *ibid.*, p. 149.
- (17) *ibid.*, pp. 460~462.
- (18) 以下日本語訳は、田部重治：ワーズワース詩集（東京，岩波文庫，1938）に拠る。
- (19) *ibid.*, The last two lines of stanza II.
- (20) *ibid.*, The last two lines of stanza IV.
- (21) Hartley は1796年の生まれであるから、この年10才の筈である。草稿は1803年にもう書かれていたのか、それとも詩人の間違いか。
- (22) *ibid.*, 11, 125~132.
- (23) *ibid.*, 11, 133~171.
- (24) *Poetical Works*, p. 206 The world is too much with us で始まる Sonnet 11. 9~10.
- (25) Immortality Ode, stanza XI 11, 196~207.